

原子力にルネサンスを

歴史からの未来へのカギ



原本

森 一久

原子力にルネサンスを

歴史からの未来へのカギ

目次

「それでも地球は動く」	5
はじめに——人間は不真面目になった？	7
一〇〇年前の大発見	10
アメリカは対ナチス・ドイツを考え原爆開発	14
『原爆の子』の叫び	17
マッカーサー、原子力開発を禁止	19
学者、政治家、開発着手に動く	22
日本学術会議、「三原則」を条件	29
原子力委員は財界、学界トップを	30
資料——歴代原子力委員長	36
民間の一本化のために原産会議設立	38
アンゼンハワー、平和利用宣言をする	40

- 米ソのせめぎ合いで加速 41
- はじめてのコールドホール型は東海村へ 46
- 原子力災害補償問題が持ち上がり、法律化 54
- 原子力は新しい制度を生む 60
- 追い返された「七人の侍」 62
- 放射能の研究は原爆の否定から 63
- 資料―核実験実施回数 64
- 微量の放射線の影響を疫学的に結論づけるのは無理 68
- 昭和天皇も原子炉内部を覗かれた 72
- 研究炉設置は私立大学が先 73
- 『赤字白書』とストライキ 74
- 原子力潜水艦を安全といえるか 77
- 「国策」に反対、有罪判決 80
- 〈むつ〉人札相手にされず、船体と原子炉分割発注へ 81

- 英・仏の売り込みで東海再処理に冷たい眼 84
- 再処理事業は「欧州では近代産業」 87
- 温水養魚で浜焼きを名物に 89
- フランスに鞍替え 93
- 外国との共同事業も視野に 95
- 危険情報も外国から 98
- WHO、照射食品は問題なし 99
- 新人類「原子力屋」の悩み 101
- 〈むつ〉は技術的に失敗はしていない 105
- 土光さん号令でソ連と協力 107
- 原子力の意味を考え直す 110
- 平和を達成するのは「民衆の力」 112
- 分析研のデータ捏造事件 113
- 電源三法成立へ 114

- フランスからの濃縮ウランの輸入は四国電力が魁
 日本は九七番目のNPT批准国 116
 インドの核実験はプルトニウムを利用 120
 東海再処理工場問題―黒船来る 121
 INFCEでは勝負つかず 122
 CANDU炉は国産路線の「邪魔」 124
 カーターさんのお蔭？再処理を民営で 127
 CBTと核兵器廃絶との関係 130
 核兵器に絶対関与しない態度が必要 132
 戦争のルールを立て直すべき 134
 西洋人のフィロソフィーは 136
 むすび―難局を開く四つのカギ 138
 資料―X線の発見から今日まで（主なきこと）
 あとがき 170
- 145
- 115

「それでも地球は動く」

はじめに——人間は不真面目になった？

一〇〇年前から従来の物質に関する考え方を根本的に変革するような自然科学の大発見が続きました。それまで絶対と思われていた物質という存在が相対的なものと分かり、相互に変換し得るし、また物質が消滅すると膨大なエネルギーになるといったことも予言され、実証されたのです。その上、我々の住む時間・空間の認識も根本的に変わり、時間と空間とは独立なものではない、特にこの世で最も早い光（その速度は秒速三〇万キロメートルという大きなものですが、とにかく有限）を超えることは、決して出来ない上に、いかなる観測者に対してもこの速度は不変であることが確認された——考えてみれば、この世の悲劇のすべては時間というものが一方的に流れ、一秒たりとも後戻り出来ないことに起因しているのですが、この事は光というものの、こう言った全く唯一特殊な性質に直結しているのです。何十億年かかって試行錯誤のすえ進化してきた人類は、こんな光を媒介とする認識体系しか持てなかったものでありましょう。しかし、ひょっとして、宇宙のどこかに、全く違った認識体系を持つ生物がいて、我々人類を「生老病死・の四苦八苦」にが

んじがらめになって、ああ可愛そうに」と見守っているかもしれない。・・・

原子核科学の意味

話を本筋に戻しますが、自然科学の発見や進歩により、最初に人類が大きなショックを受けたのは、約五百年前のいわゆる地動説の登場の時でした。それまでは、一定の時間・空間の枠組の中、太陽や星の天空は地球を中心に回転し、その地上では神に選ばれた人間が・・・と思い込んでいた。それが地動説をはじめとする近代科学の登場で、それまでの世界観が根本から覆えされたのでした。そんな危険な科学者を裁く宗教裁判など大きな混乱の中から、《ルネサンス》という人間精神の大革新運動を経て初めて、やっと人間は自信を持ち直して、近代の科学文明の創造に取り組むことが出来たのでした。

原子核科学の登場は、植民地争奪の挙句の果ての、二つの大戦の最中、人間精神の最も荒廃した時にあたりました。最初に述べたような、原子核科学を中心とする自然科学のビッグ・バンは、地動説の時を遥かに超える大革新で、人間存在の根本をも揺るがす大変動であったにもかかわらず、集団としての人間は、てんとしてほとんど何の精神的衝撃を受けず、むしろ「この科学のうまい利用法は何か」にばかり頭が向いて今日に至っているのです。(戦争や産業への利用から始まり、政治家や運動家の中に原子力へ

の期待、不安を自分の立場や地位に利用するのが目だってきました。）」わずかに開発の初期、一部の物理学者の先達が、原水爆戦争による人類絶滅の危機を訴え、世界連邦の樹立を提唱した位のものでした。

哲学も宗教もそして自然科学も、そして社会も国家の諸体制も、いずれも等しく人間の精神活動の産物なのであります。その間の統一性とか矛盾とかいったことについて、数世紀前の地動説登場の頃の方が、人間は遥かに真剣で真面目だったと、私は思います。

そういう意味で、もし成功すれば膨大なフロンティアを持つ《原子力文明》の創造は全くその緒にもついていないのであって、いま眼前に繰り広げられている、原水爆競争とその破綻や、平和利用における軽水炉発電の実績等は、いわば試行錯誤の末に咲いた徒花のようなものでしょう。

一〇〇年前の大発見

ちょうど一〇〇年前、X線の存在をレントゲンが発見し、その後キュリー夫妻が放射能を人工的にも作れることを一九三四年（昭和九年）に発見し、作ったのです。

日本でもその頃には粒子を加速して早い速度にして、突き抜けるようにするという研究のための加速器を、既に台北大学とか大阪大学などで建設しております。今では人工放射能はガン治療とかいろいろなことにも使われています。余談ですけれども、当時台湾は日本の植民地でしたが、その台北大学に最初の小さい加速器でしたけれども作りました。

この地上には酸素とか炭素、水素などいろいろな物質が九二種類くらいあるわけです。これらの物質、例えば水素と酸素と珪素のようなものがくっついてガラスという透明なものになったりするわけですが、こういう一つひとつの元素そのものを変えることができるらしいということは、昭和十年前後、日本が大変な戦争を始めてしまう前からある程度分かっていたわけです。外国でもいろいろな研究があり、物理などの国際的な雑誌にもいろいろな可能性の研究が載っていたわけですが、それをだれが最初に見つけたかはなかなか

★ピエール・キュリー
マリー・キュリー

← ジョリオ・キュリー
イレーヌ・キュリー

か難しいのです。そうしているうちに、一九〇八年（昭和十三年）五月には、前に地上に存在する元素の中で一番重いウランが壊れる可能性を、ドイツのオットー・ハーンとストラスという二人の学者が発見をしました。水素の中にも重い原子やら軽い原子があるのですが、とにかく水素から始まってウランまであるわけです。この一番重いものがどうも核分裂を起こす、ボンと二つに割れて全く別の元素になってしまうということが発見されたわけです。

この辺は既に学会の論文に出ておりましたから、日本の学者も当然気が付いておりました。その翌年には理化学研究所で、仁科芳雄先生のもとで追試をしています。大変ユニークな研究所で、湯川秀樹、朝永振一郎という先生方がそこで皆育ったのです。そして「どうやらそういうことがあるらしいな」ということが昭和十四年には分かっていました。つまり第二次世界大戦が始まったのが昭和十六年ですから、その二年くらい前から分かっていた。「しかもその時に核分裂をするとエネルギーが出るらしい」ということも分かっていたわけです。

元素を軽い方から重い方まで並べてみますと、水素からはじまって真ん中が一番安定しているものがあります。原子の中心部にある原子核というのは、〈おむすび〉のように

〈飯粒〉がたくさんくっついて、なんとか一つの塊になっています。ウランは230幾つという多数の飯粒を持っています。〈飯粒〉は具体的に言いますと中性子と陽子ということになるのですが、電気を持っている飯粒（陽子）と電気を持っていない飯粒（中性子）がガチャとくっついていきます。余りたくさん集まると重くなり、不安定になります。あと飯粒一つ付けることによってポツと二つに割れる可能性があるのではないかと前から言われていました。

つまりこの地上に240以上の〈飯粒〉を持つ大きな〈おむすび〉はないから、どうやらそれ以上のものは安定でないのです、この地上に存在にしないのだろうと想像されてはいたのです。一番軽いのは水素、これはたった一つの飯粒と考えていただいたらいいいのですが、もちろん水素には二つのもの三つのものもあります。

そういうことで核分裂が起きると、その時におむすびが割れるわけですから、飯粒がたくさん飛び散ると考えてもいいのですけれども、そうではなくて、飯粒は結構お互いに非常にくっつきやすい特別の力をもっておりまう。大体均等の大きさに二つに割れると、この新しいおむすびと古いおむすびは仕組みが違ふものですから飯粒が幾つか余ります。電気を持っていない飯粒である中性子が幾つか出る、二つ三つ余計というか余ったものが出

しかも、おむすびであるウランが二つに割れると、その二つのおむすびを加えた重さは、はじめのウランより軽くなります。その軽くなった分がエネルギーとなって出る。そのエネルギーは破片のつまり二つの新しいおむすびが走るエネルギーとして、破片を飛び散らすエネルギーになって出るわけです。その時にその余った飯粒がポロポロと二つ三つ出る。その時出た電気を持っていない中性子が、またその次の隣のおむすびを分裂させると、だんだん鼠算式に核分裂、連鎖反応が起こるのではなからうかという可能性も最初から分かり、注目されていたわけです。

その当時の学者は必ずしも原爆のことを考えていたわけではありません。純粹な研究として取り組んでいました。ところが、おむすびが割れた時に中性子という電気のない物質が出、その出方が一瞬に出て、次の瞬間にその隣のことを分裂させて、エネルギーを出し、バンバンと爆発が一遍に起きてしまうのです。けれども、分裂して出てくる中性子にも一秒くらい遅れてポロ、ポロと出てくるのがある。二つに割れて落ちていたなと思っている時にポツンポツンと出る飯粒があるのです。飯粒一つ余計だったから出すよという感じのものがある。これは〈遅発中性子〉、遅れて発生する中性子といっているのですけれ

ども、これがもしなかったら、核分裂のエネルギーが爆弾的に一瞬でパンと起きる形のエネルギーだけにしかなかったのです。正に天の配剤というほかないでしょう。この遅発中性子というものがあるということに人間が気が付いたために、この遅れて出てくるものを旨く制御していけば、パンと一度に爆発するのではなく、じりじりと、連鎖反応を起こすことができるのではないかと気が付いたわけです。

アメリカは対ナチス・ドイツを考え原爆開発

まだそのころは昭和十五年くらいですから、まだまだ原爆を考えるとという時期でもなかったわけです。ということではいろいろな研究をしているうちに、このウランの核分裂で出てくる中性子によってまた核分裂を起してまた中性子が出る。その中性子で連鎖反応が起きるのですけれども、と同時に、ウランの中に二種類あるうちの238という重い方のウランに、中性子、電気を持たない飯粒がくっつくという別な新しい元素、プルトニウムがどうもできるらしいということも分かったのです。そのころから日本も昭和十六年十二月八日にアメリカ、イギリスと戦争を始める。英米とドイツとの戦争も激しくなるといふな

この原爆のエネルギーをいかに使うかというところも、アイゼンハワーをはじめとする偉い学者が、もし放っておいてドイツなどが最初に原爆を作ったら大変だから、その前にアメリカがやるべきではないか」という建議書を出して、それがもとで原爆の開発に向かうわけです。

それで原子炉が初めてアメリカに出来たのが一九四二年（昭和十七年）十二月二日です。それがC P 1という原子炉で、初めてゆっくりと分裂を起こさせる原子炉というものができたわけです。このころからいろいろなことがありまして、三年後の八月六日に広島に原爆が落とされ、八月九日に長崎に落とされました。広島型原爆はウラン235、核分裂し易いウラン235を濃縮して、濃くして作ったものであり、長崎型原爆はプルトニウムを抽出回収して、それを集めて原爆にしたものです。天然にあるウランは、140分の1がウラン235で、140分の139がウラン238です。

238という方は比較的安定で、普通の中性子、ゆらゆらとした速度の遅い中性子ではなかなか分裂しないものです。ウランの235と238を分けるというのは大変なこととて、化学的には全く同じウランという物質でありながら重さだけが違います。235と238の重さの3の差で、二〇〇分の一しか重さが違わないということを利用して分け

やたらと
 ということですから大変です。いろいろな分け方があるのですが、日本などが平和利用のために利用しています方法は、ウランを気体にして入れ、電気洗濯機の回転筒（絞りの器）のようなものを一〇〇万個かその程度並べまして、次々に移しかえていくと、重いものが比較的外側に集まって分離できるものです。そのほか、素焼きみたいな目に見えないような小さな穴に、気体にしたウランを通すと、要するにウラン235と238の化合物の重さが違うものですから、飛ぶ距離が異なり、選択的に分かれていくということで、この235と238を分けるというのはできないことではないのですけれども、たいへん難しいということです。

ウラン235の核分裂で爆弾が作れるのではないかということは、日本でいえば終戦の四〇五年前から原理的に分かっていたのですが、ウラン235と238を分けるということとはいくらアメリカでもそう簡単にはできないだろうということで、この戦争には間に合わないのではないかという判定をしたりしていたわけです。

しかしもう一つの方法があったわけです。それがつまりプルトニウムで、ウラン238が中性子を吸収して出来た、これは全く新しい、今まで地上に存在しなかったものです。全く存在しなかったという科学的にはちょっと間違いで、ほんの少し地上には存在して

いるのです。地中には山脈が降り注いでいるわけでも、海の下にも山脈が貫いているわけですが、その中には中性子もありますから、天然にあるウラン238につかまってプルトニウムに変わつることもあるわけです。けれども、大量に初めて使うという意味では、プルトニウムを分離して原爆に使うという可能性に、ある意味では最初から注目されていたのです。

『原爆の子』の叫び

私はあの当時のことを、日本人というか、広島の人を含めてですが、その時にどう受け止めたかということをも最近いろいろ調べてみました。世界を敵にして、大変間違った戦争を始めて、酷い目にあつたという中で、その終わりの時期に、原爆によって戦争が早く終わったかはまた議論のあるところです。しかし少なくとも日本が原爆の被爆体験をしてしまったということをどう受け止めたかという点、たった飛行機が一機だけ来て、もの凄いいエネルギーで一〇万人の人が瞬時に死んでしまったということです。このエネルギーをもし平和に使われたらすばらしいなということは、ある程度日本人も思ったことだろうと思

います。その一つの例として、岩波文庫に二冊に分かれて出版されています『原爆の子』という本があります。原爆から数年後の昭和二十六年に刊行されたもので、ちょうど爆弾が落ちたところに四歳から一二歳だった子供に作文を書いてもらって、それを教育学者として有名だった長田新（おさだあらた）先生が編集して出したものです。一〇六人の幼気な子供が原爆の経験、家族の悲しい経験を書いているわけです。しかしその中のほぼ一割、八人くらいの少年少女は「しかしこのすごいエネルギーを人殺しや戦争のために絶対に使わないで、平和のために産業のために使ってください。それがせめてもの広島で亡くなった人に対する償いではないか」ということを言っているわけです。それが後にいよいよ原子力平和利用が始まる時に、原子力に対する警戒心とともに、日本としても平和利用をしようではないかという合意が出来たものであろうと思います。

ちょっと余談になりますけれども、ごく最近中国が盛んに原子力発電を始めているのですが、このあいだ上坂冬子さんが話しておられましたけれども、中国へ行って「原子力は怖いといって反対も随分あるのではないですか」と聞くと、「中国でも確かに反対はありますよ。ですからPR映画を作ったのです。見てください」と言われてそれを見たそうです。そのPR映画を見た時にびっくりしたのは一番初めの五分くらいは原爆実験の映像を

見せて、そのあと「原子力平和利用の利便性、原子力の平和利用」ということを示して、安全性などを説明しているというものでした。これは日本人に見せたら逆ではなにかと思っただけで、おられましたけれども、要するにこの方法が一番分かりやすい、こういう凄いエネルギーを平和に使うのはすばらしい。これは誰でも一番分かりやすいと中国の人は言っているというのです。「なるほどな、所変われば品変わる」で、その品の見せかたは違いますが、やはりそこが一つの原点であることは間違いないわけです。

マッকারサー、原子力開発を禁止

昭和二十年に日本が占領されて、マッকারサーが厚木の基地に降り立って、一カ月もしないうちに「もう日本では原子核の研究はしてはいかん」と禁止の命令を出しています。それで二カ月後には理化学研究所と大阪大学、京都大学の加速器、この三つは当時としてはかなり大きな加速器だったもので、こんなもので原爆などではできないわけなのですが、とにかく壊して東京湾などにぶち込んで捨ててしまったという出来事が起きたわけです。原子炉が出現する以前において、サイクロトロンはラジオアイソトープ生産に最も有力

な装置でした。当時実は日本は、アメリカに次いで二番目の能力を持っていたのです。仁科先生は、米の科学情報調査団が理研を調査にきたとき、サイクロトロンでアイソトープを生産し、それで生物の研究をし、食糧の増産に貢献したいと説明しています。

サイクロトロンを壊したことに米国内において非難する声が上がリ、そののちワシントンと東京のGHQの間でのやりとりの結果、サイクロトロンの破壊は過ちであり、ワシントンとの連絡ミスだったと弁明しています。

それから翌年には極東委員会で日本の占領を管理していたのですけれども、そこでも日本は原子力の研究は一切禁止するべきであるという決議をしたりしています。

しかし様子がだんだん変わってきました。その中でも放射線を出す同位体元素、ラジオアイソトープというのはいろいろ病気を直したりする研究が欧米で始まりました。ラジオアイソトープを混ぜて、砂がどこに向かって流れているか、どこに堆積したりするかを一目瞭然に調べたりしました。これはダムなどでの砂の溜まり具合の研究にも使えます。この使い方をトレーサーと言っています。

昭和二十五年にはアメリカからアイソトープを輸入しました。これは確か最初はアメリカ



仁科芳雄氏と米国から初めて送られてきたアイソトープ

で理化学研究所で受け取っています。その時は、おっかなびっくりで、誰がアイソトープが入っている容器の蓋を開けるかというので大騒ぎだったと聞いています。仁科芳雄先生がアメリカの学者の非常に偉い方ともお友達だったので願いが叶ったということで、蓋を開けた時の写真もあります。その時に「私が最初に蓋を開けた」という人が二人おり、まだ二人ともお元気で、私もどっちが本当に蓋を開けたのか、鉛の板で放射線に当らぬようにしながら蓋を開けて、中の物を取り出して分析したりした人が誰かというのはミス

テリーで、そのうちどちらが本当か確かめておこうと思うのですが、今はHさんかKさんか、どちらかだとだけ申しておきます。

学者、政治家、開発着手に動く

そういうことがあった昭和二十五年ころは、ボツボツ日本も平和条約が結べそうだという状況になってきた時で、下手をすると平和条約で原子力の平和利用は禁止される条項が入るのではないかということに心配された学者がおられました。特に皆さん御承知の東京大学の学長になられました茅誠司先生とか、伏見康治先生など何人かの方が、「今のところ平和条約の原案には原子力平和利用の禁止条項が入ってないようだけれども大丈夫か」ということでアメリカの友人にも「そういうことはないだろうな、平和利用まで禁止することはないだろうな」といろいろ働きかけていただいたようです。

そのころからボツボツ平和利用という話があちこちで出てきたわけです。いろいろなグループがありまして、学者の方はもちろんそういう意味で外国の情報をよく見てはおられましたけれども、産業界の人、政治家、その他の人々も、日本は原子力平和利用ができる

な後藤文夫さんが、戦時軍用フリスンに入っておられたのですが、軍用でアメリカの新聞を見ていたら、どうもアメリカでは原爆で電気を起こしているらしいぞ、日本も勉強をしなればいかんなどということ、面会にきたある人に言ったようです。

戦争中には、何とか早く戦争を止めさせよう、軍部の横暴を抑えようとした政治家グループがあり、後藤さんもその一人でした。近衛文磨さんを担ぎだして大政翼賛会というのを作りまして、なんとか軍部を抑えようといういろいろやってみたけれども、しょせんはとも力が足りなかったのですが、そういう政治家グループが当時あったのです。それなりに、自分たちは結局軍部を抑えきれなくて、日本を完全に破滅に導いてしまったという強い責任感を持っていた人が何人かおられたわけです。その中のあるグループは今の後藤文夫さんのその話を聞いて、そうか一つそれはそういったことを日本で具体化するために犬馬の労をとろうかと、随分働かれた人がおります。

私、森は昭和二十三年に大学を出てジャーナリストをしておりました。中央公論社で『自然』という科学雑誌がありまして、そこであちこちから原子力発電のデータがいろいろ出てくるということで次々に翻訳・掲載したりしていたわけです。そうした時に経団連

た
 (経済団体連合会)もそうですが、電力経済研究所などの偉い方が、「日本も原子力の平和利用を前向きに取り組むべきである」という声明を幾つか出したわけです。電力経済研究所とは、元々は日本発送電を解体し、株を何円かで分配した時に何錢かの端数を集めたら一億円くらいになったので、それを資金にして作った電力の経済性を研究する団体です。その当時私は、大学の助手とか研究生であった連中と原子力をちゃんと勉強しようではないか、平和利用の可能性を勉強しようではないかと〈原子力談話会〉という、今の言葉でいえばNGOを作りました。日本ですぐに平和利用を始めるかどうかは別としていうことで勉強会を作り、今思えばよくやったものだと思いますけれども、富士山の精進湖の小学校を借りて合宿をして、皆の勉強の結果をお互いにレクチャーし合っていました。その時にそのような平和利用に前向きに取り組むべきという声明が出たものですから、「けしからん」ということになりました。私もその当時は、広島、長崎の被害の上に立ってやっと原子力を平和利用として人間が手に入れたものを、財界などが利益のために使うなどもってのほかと、一つ抗議に行こうではないかというので、今の丸ビルの側で赤レンガ・ビルの一つにあった電力経済研究所に仲間三人で出かけて行っただけです。「今朝、新聞で読んだのだけれども、貴方たち研究所は財界が主としてやっているらしいが、日本と

もない」という文面の抗議文を持って出掛けて行っただけです。

その時、橋本清之助さんという方、大政翼賛会の事務局長で何とか軍部の暴走を抑えようと、早く戦争を止めようと努力した中の一人なのですが、その人がおりました。私から見たら随分歳の方が、奥の方で孟子か孔子を声を揃えて読んでいます。その時はお寺みたいな、えらいところへ来たなと思いました。その橋本さんが出てきて曰くなので、「自分たちは要するに日本を目茶苦茶にしたという意味で戦犯であったり、戦犯を免れたりしているけれども、とにかくすごく責任を感じて、今、世の中のために何かしたいと思っています。原子力が日本の復興に役に立つなら何かやってみたいと思っていた。その気持ちを書いただけなのだ。大体貴方らのような若い人で物理を勉強した者がそんな子供みたいなことを言っていないで、原子力開発を間違えなくやるために、外で文句をいうばかりだけではなくて、中に入ってきてやったらいいではないか」と言われて我々もちょっとびっくりしたのです。しかしその当時は何せ、レッドパージとか、ちょっと左がかった人は偏向だと、会社を首になっていた時代ですから、政府が原子力の研究をはじめれば、

り、本当に勘がいい真面目な「風見鶏」なのです。それから社会党では岡良一さん、松前重義さん、それから神奈川県志村茂治さんです。それから自民党では前田正男さん、秋田県の斎藤憲三さん、稲葉修さんです。この方々を七人の侍と言っていたのです。そのグループで、「こんなことをやっていたのではないつまでたつても日本は世界に後れを取るだけだぞ」ということで、改進黨の代議士たちが党の秋田県連大会に行ったその帰りの汽車の中で、思い切って自分たち議員でとにかく予算を提出しようではないかとなりました。その当時は保守系も改進黨とか自由党とか日本自由党など政党がいろいろで、政界が今以上に複雑でして、保守の中も割れたりいろいろしていたので、政府を待っていても駄目だから、とりあえずとにかく予算を付けようということで、ウラン235からとったのだと思うのですけれども二億三五〇〇万円の予算を三月二日に急遽提案し、またたく間に予算を通してしまったのです。

それで日本学術会議では、議論をしている最中であり、原子力を始めるべきかどうかから議論すべきもののなのに、急に予算を付けたのはけしからんということで、大騒ぎになりました。その時に中曾根さんのところに私の親しい新聞記者が行った時、要するに学者のほつぺたを礼車で叩かないと動かないからと言ったというのですが、最近中曾根さんが

と書いています。

日本学術会議、「三原則」を条件

とにかく予算の効果はあったのだと思います。日本学術会議側の検討も拍車がかかりましたし、政府の方も勉強を始めるということでした。日本学術会議での結論は、いわゆる原子力平和利用三原則で、原子力は平和利用に限る。それを保証するために自主・民主・公開のもとに行うということです。自主というのは要するに外国の言いなりにならない、当時の原子力の研究の中心だったのは核兵器国ですから、そんな手先になんかならないぞということことです。民主というのは、政治的な意見・信条が、それこそ赤だろが黒だろが、誰でも参加したい者は参加させるということです。公開というのは国民が皆監視している状況で行うのだということです。この原子力平和利用三原則が通るならばいいのではなからうかということでした。政治家も先見の明があったのかなかったのか、日本学術会

★1 中曾根康弘・当時改進黨、岡良一・社会党、松前重義・社会党、志村茂治・社会党、前田正男・自民党、斎藤憲三・自民党、稲葉修・自民党

議から提案された原子力平和利用三原則を、全部呑もうということで、原子力基本法が昭和三十年の年末ぎりぎりでしたけれども通りました。

それで原子力基本法のもとその三原則を遵守するため、その監視のための〈watch dog〉として、原子力委員会を置くということになりました。それも随分議論があったのですが、お金もたくさん使うことだから、今で言えば公正取引委員会みたいな行政委員会で行政権限を持たせなければ駄目だという意見と、政府とは一線を画して政府にものを言えなければ駄目だという意見がありました。役所の人だと政府の方針に反することは容易に主張出来ないという制約を受けるので、そうでないほうがいいという議論も、いろいろした結果、「総理大臣はその意見を尊重しなければならない」という、妙なものなのですが、いわゆる諮問委員会としての原子力委員会が発足して今日に至っているわけです。

原子力委員は財界、学界トップを

そこで中曽根さんなどが中心でしたけれども、原子力委員会のメンバーを揃えなければならないというので、まず財界から一人、学界から一人、とにかく一流の方というので、

湯川さんをお説きにかかるわけです。湯川さんはこういうのは大嫌いで、「冗談ではない、政府の諮問機関などに入れるか」などというものだったのですが、そこで我々も「とにかくそんなことを言っていないで、原子力のラインに先生も入って、その監視役をしなければいけないではないですか、入って下さい。入りなさい」と若い連中が、どっちかというと左がかった人達も含めて、私達も言うものですから、洪々それでは入るかということになりました。ただ湯川さんは京都にいらっしゃるから毎週出るなんて大変なので、自分の代理の意味も含め、藤岡由夫先生も入っていただくことになりました。藤岡さんは、当時の文理大（東京文理科大学、後の東京教育大学／筑波大学）の先生で、日本学術会議の原子力問題委員長でした。それからもう一人ということで、社会党の浅沼書記長に相談した結果、それは有澤廣巳先生がいいというので、有澤さんが口説かれたのです。

有澤さん本人に聞いてみますと、当時六〇歳ぐらいであったのですが、原子力なんて全然知りもしなかったのが、神田の「ミルクホール」で誰かとお茶を飲んでいたら浅沼書記長がちょっと会いたいというので、行ってみたら原子力委員会に入れと、やはり社会党とし



昭和31年1月4日に開かれた原子力委員会の初会合

—左から藤岡、湯川、正力、石川、有澤の各委員—

「研究などしなくても外国から原子力を輸入すればいいではないか。原子力発電はもう外国で活躍しているのだから早くやったほうがいい」と言っている。そんなことでは俺が入った意味がないから辞めたい」ということなのです。「そんな子供みたいなことを言っている」といっても、子供が親に向かって言うような話ですから、さあ大変だということで、私も新聞記者だとか仲間を集めて、先生の常宿になっていた四谷の福田家に、仕方がないから出掛けて行って、先生を口説きました。

て大いに監視しなければいけないので一人は社会党推薦ということになっているのだから入ってくれと言われて、それでびっくり仰天した」のだそうです。あの人はなかなか好奇心の強い偉い方ですから、大内兵衛先生のところに相談に行ったそうです。そうしたら大内兵衛さんが、「そうだな社会党からも入っておかないと原子力は危ないからなと、まあ入りなさいと。しかし『つまり金は使えなよ』と言ったそうです。さすがに大内兵衛さんはちゃんとしたことを言ったと思うのです。そういうことで原子力委員会のメンバーは四人揃いました。

ところが大臣ですけれども、これが正力松太郎さんです。正力さんは読売新聞社社主で、なにしろ当時はプロ野球で成功し、コマーシャルテレビで成功して、とにかく新しいもの大好きということで、いよいよ三番目のおれは原子力発電で大事業家になるのだということでした。当時かなりもう政界でも重鎮だったのですが、なにせ原子力大臣でなければやらないということで、副総理兼原子力大臣で入ったわけです。

それで発足したのが昭和三十一年の一月一日で、第一回の原子力委員会が行われたのが一月四日でした。その当時は普通の会社は一月三日か四日から働いていたのですが、私はまだ一月四日に家で寝ていたから、湯川さんから電話がかかってきて、「俺はもう原子力委

「先生いくら何でも、第一日目早々に原子力委員長の発言が気にいらなから辞めるとい
うのはいけないですよ」となだめてやっと辞めることを止めたわけです。

この時の私の覚えていることがそう嘘ではないと思うのです。その当時からお役人で原
子力委員会にはべっていた人の当時の議事録みたいなものが出てくるのですけれども、そ
れにもどういいうわけか一月四日の第一回の原子力委員会だけは無いのです。どうしてかと
思っている聞いてみましたら、第一回はとにかく役人は入れなかったのだそうです。
俺たちが大所高所から判断して原子力をやればいいのだから、向こうに行っておれという
ことで、第一回は役人なしで開催したのですね。それで今のようになくなってやっと収
まったのですが、結局湯川先生は、二年くらいたった時にお腹が痛いとかいってとうとう
辞めてしまいました。実際にあの先生は真面目で、すぐ胃が悪くなって痛くなったりしま
すので、全く嘘ではないのですけれども、そういうような時代で、原子力委員会がやるこ
となすことはすぐ記事になり、一挙手一投足が新聞のトップを飾るということでした。な
にせ正力さんが委員長ですから、とにかく俺は総理大臣の代わりに原子力を仕切っている
のだ、会議をする場所は総理府だと言うので、今の総理官邸の隣にあった総理府で、あの
当時は良かったのですが、そこで開催しました。建物がたがただから新聞記者が隣から

原子力委員会の委員は次のとおり」というので新聞に発表しないうちに一面トップに全部
出ってしまったのです。それでこの正力さんはもともと警察出ですから「犯人を探せ」とい
うので、お役人さん呼び集めて、漏らしたのはお前だろう、お前だろうと聞いて回った
わけです。皆さん否定されて、どうもよく分からないのです。どうやら壁に耳くっつけて
聞いていた読売新聞と毎日新聞の記者が、何とか聞き取って書いたのではないかと言われ
ました。もう亡くなりましたけれども、その時の原子力局長の佐々木義武さんの話による
と、どうしても犯人が出るまでは正力さんは納得しないというので、余り最後まで頑張る
ものだから、佐々木さんが最後に、「大臣、犯人が分かりました」と言ったら、「誰だ」と
言うので、「大臣、あなたでしょう」と言ったら、それで収まったという、これは意味深
長です。

佐々木義武 S49.12.9~
 前田 正男 S51.9.15~
 宇野 宗佑* S51.12.24~
 熊谷太郎 S52.11.28~
 金子 岩三 S53.12.7~
 長田 祐二 S54.11.9~
 中川 一郎 S55.7.17~
 安田 隆明 S57.11.27~
 岩動 道行 S58.12.27~
 竹内 黎一 S59.11.1~
 河野 洋平 S60.12.28~
 三ッ林弥太郎 S61.7.22~
 伊藤宗一郎 S62.11.16~
 宮崎 茂一 S63.12.27~
 中村喜四郎 H1.6.2~
 斎藤栄三郎 H1.8.10~
 大島 友治 H2.2.28~
 山東 昭子 H2.12.29~
 谷川 寛三 H3.11.5~
 中島 衛 H4.12.12~
 宮澤 喜一* H5.6.18~
 渡辺 省一 H5.6.21
 江田 五月 H5.8.9~
 近江巳記夫 H6.4.28~
 田中眞紀子 H6.6.30~
 浦野 休興 H7.8.8~
 中川 秀直 H8.1.11~
 近岡理一郎 H8.11.8~

吹田 徳雄 S53.10.4~10.21
 (元近畿大学学長)

清成 迪 S53.10.21~56.7.17
 (元日立製作所(株)副社長)

向坊 隆 S56.7.17~H3.11.20
 (前東京大学学長)

大山 彰 H3.12.3~H7.4.14

伊原 義徳 H7.4.18~

原子力委員長および委員長代理一覧 *総理(副総理)経験者

(原子力委員長)

正力松太郎 S31.1.1~

石橋 湛山 S31.12.23 1日

宇田 耕一 S31.12.23~

正力松太郎 S32.7.10~

三木 武夫* S33.6.12~

高崎達之助 S33.12.31~

中曽根康弘* S34.6.18~

荒木満寿夫 S35.7.19~

池田正之輔 S35.12.18~

三木 武夫* S36.7.18~

近藤 鶴代 S37.7.18~

佐藤 栄作* S38.7.18~

池田 勇人* S39.6.29~

愛知 揆一 S39.7.18~

上原 正吉 S40.6.3~

有田 善一 S41.8.1~

二階堂 進* S41.12.3~

鍋島 直紹 S42.11.25~

木内 四郎 S43.11.30~

西田 信一 S45.1.14~

平泉 渉 S46.7.5~

木内 四郎 S46.11.6~

中曽根康弘* S47.7.7~

前田佳都男 S47.12.22~

森山 欽司 S48.11.25~

足立 篤郎 S49.11.11~

(原子力委員長代理)

石川 一郎 S31.1.1~38.8.21
 (元経団連会長)

兼重寛九郎 S38.8.21~40.2.22
 (東京大学教授)

有澤 廣巳 S40.3.3~47.9.14
 (元東京大学教授)

井上 五郎 S47.9.14~S53.10.3
 (元中部電力(株)会長)